

# 学会だより No. 91 2010年6月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1 上智大学哲学研究室内

TEL : 03-3238-3801 FAX : 03-3238-4414 郵便振替 : 00140-8-194788

## ★第72回哲学会大会のお知らせ

今夏は下記の要領で第72回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2010年7月4日（日）13:30～17:00

会場：上智大学12号館1階102教室

## ★プログラム

### I 研究発表 13:30～15:30

○辻 麻衣子（本学博士前期課程）

『純粹理性批判』第一版客観的演繹における統覚と構想力

○吉田幸司（本学博士後期課程）

新しい存在の生起を可能ならしめるもの—ホワイトヘッド哲学研究の一視点—

### II 講演 15:45～16:45

○丹木博一（聖母大学准教授）

像と死——写真の現象学試論

### III 懇親会 17:30～19:30

会場：上智大学11号館7階第3会議室

会費：3,000円

## ☆ 講演要旨

### 像と死——写真の現象学試論

丹木博一（聖母大学准教授）

現実に存在するものとその像とは必ずしもオリジナルとコピーの関係にあるわけではない。たいていの像は何かの像であるのだから、その何かこそ像が像であることの根拠であり尺度であると思いがちであるが、実際には、その何かは像によって初めてそれとして可視化されるという場合も多い。像が現実の何であるかを構成する契機と化し、現実はその像を通して可視化の様相を変容させるのである。例えば、私たちはセザンヌが晩年に描いたサント・ヴィクトワール山の絵を見ることによって、それまでとは別の仕方で世界を経験することができるようになる。色斑の諧調が物の形態を生みだし、変化と持続とが統合するように描かれた絵に目を向けるとき、どこにも消尽点を見出すことができないという微かな不安のうちに絵のなかに取り込まれ、悲しみにも似た情動とともに山がいわば不可視のものとして顕現することに驚く。絵を通して山は新たな仕方で山になり、可視的だと信じられていたものがむしろ不可視のものとして顕現するのである。——では写真はどうだろうか。

像と現実は相互の絡み合いを通してそれぞれ変容を遂げる。私たちが生きる場とはその変容のただ中に他ならないが、写真もまた他の像と同様に自ら変容を遂げることによって現実の経験の仕方を変えてしまう力をもつ。カメラ・オブスキュラの映像と感光剤とを組み合わせイメージを定着させる技術が 19 世紀初めに発明されて以来、写真は新たな像の形態として、絵画とは別の仕方で現実との絡み合いを演じ、私たちの生の様式はその絡み合いを通して変換され続けている。「絵画が見る方法として属していた世界と、写真が見る方法となった世界とは別のものである」（多木浩二）とすれば、像としての写真固有の可能性はどこに見出されるのだろうか。——現実へのレファランスと写実性／画像の加工とキャプションによる偽装。光学と化学とを橋渡しする際のテクニック／誰にでも容易に生産できるという手軽さ。私的なコミュニケーションないしは経験／複製と増殖の可能性。連続する運動を非連續な断面に固定し、現在を過去化させる化石化機能／過去を取り戻し、忘却から救い出す解凍作業。いかなる被写体をも光と影の織物として等価にしてしまう変換器／読まれるべき豊かなテキスト。などなど。

写真の特徴はこのように多様にして内的な緊張に満ちているが、ここでは写真を構成する「まなざし」に特に注意を向けてみたい。静謐な美しさをたたえるロラン・バルトの写真論が次のように始められていたことをひとまず思い出しておこう。「ずいぶん昔のことになるが、ある日、私は、ナポレオンの末弟ジェロームの写真（1852 年）をたまたま見る機会に恵まれた。そのとき私は、ある驚きを感じてこう思った。『私がいま見ているのは、ナポレオン皇帝を眺めたその眼である』と。この驚きはその後も決して抑えることができなかった」。彼が感じた

驚きはいったい写真の何に由来するものだったのだろうか。写真を構成するまなざしの特徴とはいいったい何なのだろうか。そうしたまなざしの出現によって現実を経験する仕方はどのように組み替わりつつあるのだろうか。こうした問いかけについて、考えを巡らせてみたいと思う。

## ☆研究発表要旨

### 「『純粹理性批判』第一版客観的演繹における統覚と構想力」

辻 麻衣子（本学博士前期課程）

1781年に刊行された『純粹理性批判』第一版での「超越論的演繹論」において、構想力は感性、悟性と並ぶ認識能力としてみなされている。感性的直観の多様を結合し、また同時にこの多様を統覚の統一と結合する構想力は、感性と悟性を媒介するものとして重要な役割を担う。実際、カントは第一版において、構想力を感官、統覚と共に「三つの主観的な認識源泉」(A115)であると述べている。この記述が見出されるのが、「超越論的演繹論」第三節、いわゆる「客観的演繹」と呼ばれる箇所である。しかしながら同箇所には、構想力があたかも感性に属するように述べる(A124)など、一見すると上述の内容と相反するような記述も見受けられる。更にその直前に位置する「主観的演繹」の項では、そもそも感性と悟性との間において働くという構想力の性格そのものが影を潜めている。

このように第一版「超越論的演繹論」においては、認識一般の成立の内的メカニズムという一つの体系において、構想力それ自体の占める位置が揺れている。換言すれば、感性の側である感官、悟性の側である統覚との相互関係が曖昧なまま論じられており、一貫性を欠いていると言えよう。

本発表は、第一版演繹論、とりわけ「客観的演繹」における、上に述べた問題の解決の糸口を探るものである。その方法として、カントの「構想力」概念の成立と変遷とを順を追って概観していく。まず前批判期と呼ばれる1770年代の後半にカントが行った『形而上学講義 L1』、およびこの講義内容に影響を及ぼしたとされるヴォルフと彼の学派、次に『純粹理性批判』第一版、最後に第二版、これらそれぞれにおける構想力がいかなるものであったかを分析する。続いて以上の分析を踏まえ、第一版「客観的演繹」に焦点を絞った上で、とりわけ超越論的統覚との関連において示される構想力の内実を明らかにする。

\*

# 新しい存在の生起を可能ならしめるもの—ホワイトヘッド哲学研究の一視点—

吉田幸司（本学博士後期課程）

A. N. ホワイトヘッドの哲学的思索を貫いていた関心事の一つに創造あるいは新しさというテーマを挙げることができる。最初の哲学的著作『自然認識の諸原理』(1919年)では、自然が新しさへと移りゆくことが「創造的前進」という用語で比較的素朴に言い表され、体系の一応の完成を見る主著『過程と実在』(1929年)では、「新しさの原理」とも呼ばれる「創造活動」がその哲学の究極的なものとして位置づけられている。

だが、一方でホワイトヘッドは、自身の展開した哲学体系自体は究極的なものではないと考えていたようで、『過程と実在』の序では「事物の本性の深みを測る努力がなんと浅く弱々しく不完全であることか、という最後の反省が残っている。哲学の議論では、ある言明を最終的なものとするような独断論的確信をほのめかすだけでも、愚行の見世物である」と述べられている。

問うことそれ自体がもとより哲学的営みの一侧面であるならば、我々はホワイトヘッドのこの言葉を真摯に受け止め、「有機体の哲学」の何を課題として引き受け如何なる視点からそれを読み解いていくかと問うこと自体を一つの問題とすることができます。

本発表の目的は、こうした問題意識のもと、ホワイトヘッドが最終的に辿り着き究極的なものとした創造活動について、我々がどのような問題点をもち如何なる観点から展開していくのかを提示していくことがある。すなわち、創造活動が新しさの原理とも言い換えられていることから、新しい存在の生起はホワイトヘッド哲学においてどのように捉えられるかという問題設定を提示し、そこに潜む本質的な困難を指摘する。次いで、その哲学が新しさに関して体系的に記述をしていった時期に注目し、特に「創発」あるいは「創発的進化」の問題考察からホワイトヘッド哲学を読み解く可能性を開示していく。さらに、新しい存在の生起を可能ならしめているものは何かという形而上学的問題を挙げ、それに対するホワイトヘッドの洞見をみていくことにしたい。

## ☆ 第71回哲学会大会報告記

去る2009年10月18日(日)に第71回哲学会大会が催されました。この大会では、「『哲学探究』における想像」と題する伊藤有紀子氏の研究発表、「虚無と絶対無」と題する石井砂母亜氏の研究発表が行われたほか、シンポジウムが開催されました。テーマは「現代の宗教哲学」で、八木誠一氏(東西宗教交流学会会長)、竹村牧男氏(東洋大学教授)、伊藤益氏(筑波大学)

大学院教授) を提題者にお迎えして、フロアを交えての活発な討議が行われました。なお、三人の提題内容は『哲学論集』第39号に掲載される予定です。どうぞご期待ください。

また、荻野弘之氏(本学哲学科教授)より、「統・英国の曲線」と題した講演をいただきました。以下に報告記を掲載いたします。当日は大会が盛況のうちに開催されましたことをご報告申し上げます。

\* \* \*

## 「統・英国の曲線」

荻野 弘之(本学哲学科教授)

今回荻野先生の講演は、先生が08年9月～09年9月まで研究滞在されていたオックスフォード大学でのお話です。通例外来の研究者は Academic visitor(客員研究員)として滞在されるのですが、Visiting Fellow(客員学寮員)として滞在されておられました。

以下、荻野先生の1時間に及ぶ講演を手短にまとめます。

「統・英国の曲線」と題されたこの講演は、戦前から戦後にかけて日本ギリシア哲学における先駆的な研究をされた出隆(東大教授)の著作『英国の曲線』に由来します。荻野先生は、この「曲線」を、英国の「緩やかな丘と道によって成り立つ土地柄」や「原理から直接演繹を求める大陸合理主義と相反する英国人の気質」を同時に表現していると評され、今も尚続く「曲線」を感じられた経験より、今回の題目に選ばれたそうです。

### 1、オックスフォード大学の歴史

同大学の起源については諸説ありますが、成立はヘンリー2世が1167年に、当時の国際紛争のためにパリにいた英国人の学生を追放した時に始まったとされています。そこで追放された留学生が、以前から、ホールと呼ばれる学び舎を多く形成していたオックスフォードに集まり、散在した学問所をまとめつつコレッジが誕生しました。つまりオックスフォード大学は、近代的、国家政策的な大学(ベルリン大学、ロンドン大学、東京大学など)の成立とは反して、自然発生的で緩やかに成立した大学の一つと言えるでしょう。

### 2、オックスフォード大学の生活

同大学は、38のコレッジによって構成されておりますが、荻野先生はこの中で5番目に古いオリエル・コレッジという場所で研究されておられました。このコレッジでは先生、学生、職員の総勢500名の人々が共同生活を営んでおり、先生曰く「日本で言う小学校程度の規模」で

比較的親密に交友がなされていることを特徴としております。そのため、Hall（食堂・集会所）という世俗的な生活の中心から、靈的拠り所としての Chapel（礼拝堂）、また談話や交友の場に至る Common Room（哲研や院研のようなところ）まであらゆるものが敷地内に完備されています。先生はこうした生活の中でも日々の夕食には驚かれたそうです。夕食になると皆正装をし、先生方はガウンを身に纏います（なんと先生はご講演当日これをお披露目下さいました！）。皆が集うと木槌が打たれ、学生の代表がラテン語でお祈りを行い、食事が始まるわけです。このような一場面からもやはりオックスフォード大学ならではの美しい伝統と風土を垣間見ることができます。

### 3、オックスフォード大学での哲学

同大学には、広い意味で哲学教育に携わる教員が総勢 150 名、ほぼすべてのコレッジに哲学の専門家がおられます。中でも古代哲学は世界有数のレベルで専門家が集結しており、「基本の基本」として研究・教育が進められておりますが、このようなところを見ても、同大学が哲学という科目をどのように扱っているかが見受けられるでしょう。ただし、日本の大学と異なっていることは現代フランス哲学（ポストモダンの現代思想）のクラスが皆無ということで、荻野先生もこうした状況をみて「オックスフォードから最も遠いのはパリだ」と諧謔を交えてお話し下さいました。私が驚きましたことは、graduate seminar とされる大学院生からのクラスについてです。オックスフォード大学の特徴として、このゼミに参加される方が、大学院生はもちろんのこと退職された名誉教授まで積極的に参加されることが挙げられました。つまり、Terence Irwin 氏のような英国を代表される哲学者を中心として毎週毎週 30~40 人が集まり、国際学会のような規模でゼミが行われているのです。またその中で先生方の読書会も設けられており、例えば荻野先生の Host を務められた David Charles 氏の主催するアリストテレスの読書会では、『De Anima, Metaphysica IX』の難解な個所を、毎回 2 時間で 5~10 行を、注釈書を一切用いずに徹底的にありとあらゆる可能性まで読み込んでいく、という博識な先生方ならではの厳密な研究の在り方もお話を下さいました。これをお聞きして、テキストに忠実により深くまで探求していくことの重要さを改めて知るとともに、自分の研究に対しての誠意と情熱とに心新たに向き合させて頂きました。

他にも、アングロ・カトリシズムの中心地として知られるオックスフォード大学での神学のお話などもありました。この点も興味のある方は是非荻野先生にアタックなされたらどうかと思います。また荻野先生はこのオックスフォードでの研究期間中に、『マルクス・アウレリウス 自省録』（岩波書店）を出版されておられますので、関心のある方は、是非ご覧ください。

（記：本学博士前期課程 東 洋平）